

令和3年度第8回 感染症発生動向調査部会

令和3年11月17日

月番：大西秀典

1 前月の感染症発生動向について（2021年第40週～43週・10月）

<全数把握対象疾患>

- ・ 一類感染症については、発生報告は無い。
- ・ 二類感染症については、結核は今月の報告数は28例で、前々年の同期累計報告数345例、前年の同期累計報告数289例、本年の累計報告数が244例であり岐阜県下においては発生が減少傾向である。従来通り基本的には高齢者が多いが、20歳台の若年層にも散見される。
- ・ 三類感染症については、腸管出血性大腸菌感染症が1例、O157の発生が報告されている。
- ・ 四類感染症については、E型肝炎が1例、つつが虫病が1例、レジオネラ症が2例報告されている。
- ・ 五類感染症(性感染症以外)については、百日咳が1例報告されたのみである。
- ・ 指定感染症として、新型コロナウイルス感染症が今月の報告数は322例、本年累計16,308例と岐阜県下においても流行が続いているが前月と比較して減少傾向である。

<定点把握対象疾患>

- ・ RSウイルス感染症は県全体での発生数16例、前月比19.2%と流行が終息傾向である。
- ・ 咽頭結膜熱は19例の発生があるが、前月比76.6%と減少傾向である。
- ・ A群溶血性連鎖球菌咽頭炎は40例の発生があった。前年同期比33.3%と少ないレベルであり、全国の発生数よりも少ないレベルであるが、前月比119%と若干増加傾向である。
- ・ 感染性胃腸炎は193例の発生があり、前月比100.1%と発生数は横ばいの状況である。前々年同期比36.7%、前年同期比83.5%と例年よりは少ない。
- ・ 昨年ほとんど流行のみられなかった手足口病は今月9例みられ、前月比80.4%で減少傾向である。
- ・ ヘルパンギーナは全国的には増加傾向のようだが、岐阜県では81例発生しており、前月比70.3%と減少傾向となっている。
- ・ 突発性発疹は41例の発生があり、前月比93.2%、前年同期比75.9%で、若干少なめではあるがコンスタントに発生がみられている。
- ・ 伝染性紅斑の発生はほぼゼロの状況が続いている。
- ・ 基幹定点疾患を含め、その他目立った調査対象感染症の流行はみられていない。

2 検討すべき課題

<保健環境研究所から>

- ・ ぎふ感染症かわら版の発行について
- ・ 梅毒（特に早期顕症）における背景要因について（継続）

3 情報提供（月番委員専門分野から）

・岐阜大学医学部附属病院ではフィルムアレイ呼吸器感染パネルにより小児発熱患者のスクリーニングを行っている。元来この時期はRSウイルス感染の流行が確認されることが多いが、本年は流行時期がずれており、今月はそれほど大きな流行はみられていない。一方でライノウイルス感染が重症化して入院される症例が増えている。不顕性感染も多いウイルスであるが、ときに肺炎等に進展することがあるため注意喚起をしたい。

4 その他（感染症対策推進課から）

- ・高病原性鳥インフルエンザが疑われる事例の発生について
- ・今冬のインフルエンザ総合対策の推進について
- ・季節性インフルエンザワクチンの供給量について（令和3年10月時点の最新情報）

<検討結果>